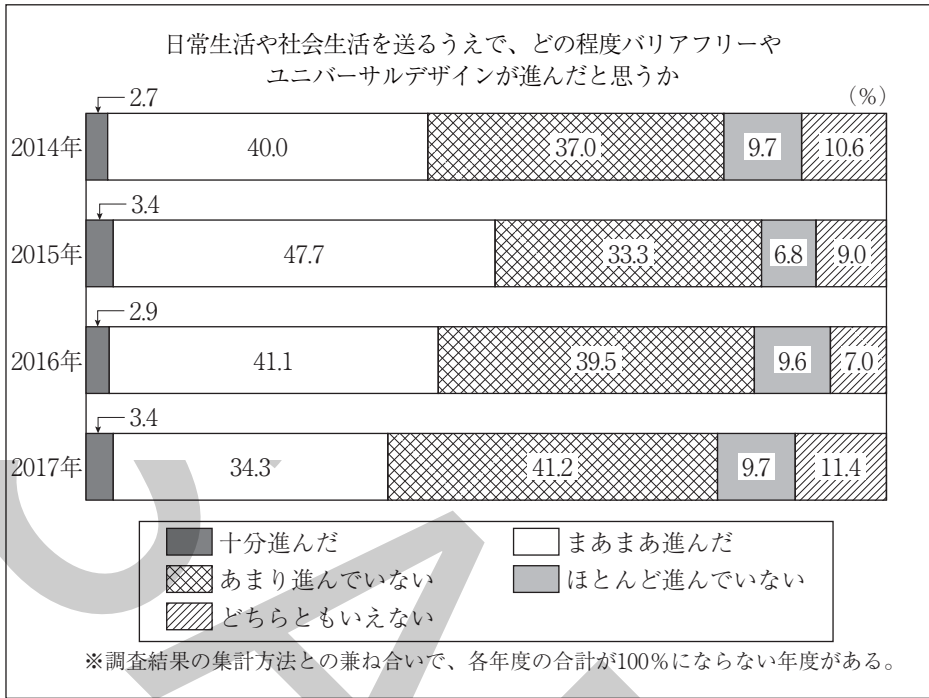




● 中学生のAさん、Bさん、Cさん、Dさんの四人のグループは、「総合的な学習の時間」にバリアフリーやユニバーサルデザインについて調べ、話し合いをしている。次のグラフ1、グラフ2、表と文章は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。

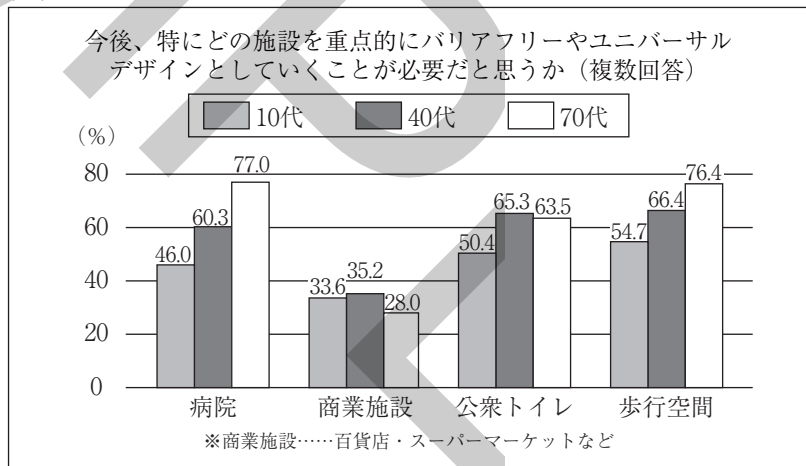
グラフ1



(グラフ1, グラフ2, 表)

内閣府「平成28年度 バリアフリー・ユニバーサルデザインに関する意識調査」より作成。

グラフ2



表

	10代	40代	70代
① 車いすの方が段差で進めなくなっていたり、視覚障がいをもっている方が駅で迷っていたりした場合、声をかけて手助けをしたいと思う	66.4%	73.3%	87.7%
② 外国人が道や駅で迷っていたりした場合、声をかけて手助けをしたいと思う	55.5%	54.0%	67.6%

Aさん バリアフリーとは、身体機能等に関して何らかのハンデを持つ人が生活を送る上での障壁、つまりバリアとなるものを除去するという考え方です。また、ユニバーサルデザインとは、年齢、性別、障がいの有無にかかわらず、人々が製品や施設、生活環境等を利用しやすいよう、はじめからデザインする考え方です。バリアフリーやユニバーサルデザインの現状や人々の意識をもとに、みんながより生活しやすくするための課題について話し合いたいと思います。

Bさん グラフ1の二〇一七年の数値に注目すると、ことがわかります。

Cさん もしかすると、日本は年々高齢化が進行しているので、施設などに関して不便だと感じる人の割合が増えているのでしょうか。

Dさん そうですね。ただ、減少の割合が大きいので、そのことに加えて、施設自体の改善が不十分だという問題もあるのではないかと思います。

Aさん では、グラフ2を見てみましょう。グラフ2は、今後重点的に改善していくことが必要だと思う施設に関する、世代ごとの回答の一部です。どのようなことに気づきますか。

Bさん 七〇代の回答に注目すると、病院や歩行空間という回答の多さが目立っています。特に病院は、世代間の差が大きくなっています。

Dさん 病院は高齢者に限らず、一時的なけがや病気などで体の自由が利きにくい人が利用する施設です。また、歩行空間は小さな子どもが一人で歩くこともあります。これらの施設は、高齢者はもちろんとして、あらゆる人たちの安全確保のために改善が必要です。

Cさん 残りの二つの世代も含めて見ると、公衆トイレと歩行空間は、全ての年代で回答が五割を超えていることがわかります。日常的に使用する頻度の高さが、回答結果に出ているのだと思います。

Dさん 商業施設は他の施設と比べて回答の割合が低くなっていますが、多くの人が集まる施設なので、通路を広くするなどの改善が考えられます。

Bさん 公衆トイレは突発的に利用するという点が特徴的です。また、和式の場合だと狭い空間でしゃがむ必要があり、体の自由が利きにくい人にはよりつらいでしょう。洋式に改善するべきだと思います。

Aさん それぞれに利用者の傾向や施設としての特徴があるということですね。

Dさん 施設の改善は、高齢者や身体的なハンデを持つ人たちのことを考えて行うことは当然ですが、さらに広い意味で、困っている人の立場を考慮して行うべきだと言えそうです。

Aさん では、最後に表を見てください。心のバリアフリーとは、身体機能等に関して何らかのハンデを持つ人に対する心のバリアを取り除き、積極的に協力していくことです。①の質問に対して「手助けをしたい」と思っている」と回答した人の割合は、世代によって差があります。②の質問では、「手助けをしたい」と思っている」と回答した人の割合が、①と比べて少ない点も目立っていますね。

Dさん 外国人も困ることがあるのに変わりはありません。バリアフリーという言葉は身体的なハンデを連想させますが、私たちは言葉のイメージにとらわれすぎているのかもしれない。

Bさん 日常生活で困る場面は、あらゆる人に起こりえます。どのような相手であっても、困っている人の立場を考えて、積極的に手助けをしなければならぬということですね。

Cさん そのような心構えを持つことができれば、身体的なハンデを持つ人に協力しようという気持ちも、自然とすべての世代に広がっていくと思います。困っている外国人に対しても、同じことが言えるでしょう。

Aさん これまでの話を総合すると、グラフ2と表から読み取った内容から、みんながより生活しやすくなるための課題は、ことだと考えられます。まずは自分にできることから実践するようにしていきます。

25

15

10

5

20

55

45

35

30

